

令和7年 唐津看護専門学校自己点検・自己評価

1. 自己点検・自己評価についての取り組み

学校評価は、「学校運営評価」と「授業評価」で構成する。学校評価を教育機関としての機能を包括的に判断する評価と定義し、年度末に評価を実施している。評価項目は、Ⅰ. 教育理念・教育目的 Ⅱ. 教育目標 Ⅲ. 教育課程経営 Ⅳ. 教授・学習・評価過程 Ⅴ. 経営・管理過程 Ⅵ. 入学 Ⅶ. 卒業・就学・進学 Ⅷ. 地域社会/国際交流 Ⅸ. 研究 として、5段階評価を行っている。

授業評価は、学生による教育方法と内容の評価(以下「学生による授業評価」という。)及び「教員による自己の教育方法と内容の評価(以下「教員による自己評価」という。)と定義し、授業の進め方、授業内容、学生自身の授業への取り組む姿勢など、授業アンケートを実施している。教員による自己評価は、授業の準備及び授業の実施結果と学生による授業評価の結果を踏まえた授業内容の振り返りを授業担当教員が行っている。また、令和4年度よりホームページへの公表を行っている。

2. 学校評価結果(令和6年度)

令和7年3月、看護教育自己評価指針に基づいて、大項目9領域、中項目125項目の学校評価を実施した。以下は大項目毎にその平均値を表にしたものである。(表1)

表1. 令和6年度学校評価

		高等課程		専門課程	
		令和6年度	令和5年度	令和6年度	令和5年度
I	教育理念・教育目的	4.7	4.5	4.7	4.7
II	教育目標	4.9	4.8	4.9	5.0
III	教育課程経営	4.8	4.6	4.8	4.8
IV	教授・学習・評価過程	4.7	4.6	4.6	4.8
V	経営・管理過程	4.3	4.1	4.2	4.2
VI	入学	3.5	3.2	3.5	3.5
VII	卒業・就業・進学	3.7	3.6	4.0	3.8
VIII	地域社会	4.4	4.3	3.7	
	地域社会/国際交流				
IX	研究	3.6	3.3	4.0	4.0

【評価基準】

5. 良く当てはまる
4. 当てはまる
3. 大体当てはまる
2. あまり当てはまらない
1. 当てはまらない

大項目	平均点		分析と今後の改善点
	高等課程	専門課程	
I 教育理念・教育目標	4.7	4.7	<p>教育理念・教育目的に基づいた学年別学級運営方針を年度初めに明示し、評価している。看護専門課程は新カリキュラム移行後2年目、看護高等課程は新カリキュラム移行後3年目となる。両課程とも学生へ当校のカリキュラムの特徴や卒業時の到達目標(DP)を科目初講や各実習オリエンテーション等でも随時、周知徹底に努めた。学生のアンケート結果で、看護専門課程では各学年とも教育理念・目標の周知にはつながっていた。今後は学生自身が日頃から教育目標を意識した行動ができるよう指導を強化する。</p> <p>看護高等課程の学生のアンケート結果では、1年次に中間と年度末時を比較して評価が高くなっていった。2年次の准看護師卒業時到達目標の学生アンケート結果からすべて「そう思う」(4段階評価で3)以上の結果が出ていたが、教育理念・目標の周知状況を把握するアンケート調査が収集できず、適切な評価のタイミングや働きかけが必要であったと振り返</p>

			る。両課程とも平均点は4.7となっており、昨年とほぼ同様と考える。
II 教育目標	4.9	<u>4.9</u>	<p>教育理念・教育目的を意識し、関連づけられた教育目標として、学生が理解し実行しやすいように年次行動目標を明示している。また、教員間でも共通認識しながら教育目標の達成に向け取り組んでいる。両課程とも、新カリキュラムの実践を通して、卒業時の到達目標との関連づけを思考しながら学年目標や内容、到達レベルを検討しており、改善項目を明確にしている。今後もさらに改善に努めていく。</p> <p>看護高等課程は新カリキュラムの実践が3年目となり、学生アンケート結果の到達目標(DP)と授業の関連性は「そう思う」(4段階評価で3)以上であり、昨年度より平均点が高い。</p> <p>看護専門課程は新カリキュラムの実践が2年目で、旧カリキュラムの学年も混在するため、到達目標(DP)と授業の関連性を把握することは難しく、平均点が昨年より低い結果となった。</p>
III 教育課程の経営	4.8	4.8	<p>両課程とも卒業時の卒業時の方針(ディプロマ・ポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)及び入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)を明確化し、ディプロマ・ポリシーと授業目標との整合性、教育目標の到達度の評価を体系化(アセスメント・ポリシー)して明示している。</p> <p>教員は専門性をできるだけ考慮した教科・教授と考えるが、教科と実習の全てを専門のみとすることは難しく、教員同士の協力体制によって補っている。また臨床(認定看護師等)と連携を図りながら専門性を取り入れた教育の体制を整えるよう努力している。</p> <p>また、授業設計に集中できる時間が確保できるように自己研修を年間15日設定しているが、取得の状況も個人差が大きい。職務満足度の向上につながるよう、計画的・協力的な業務支援ができるよう努力していく。</p> <p>例年同様、教員間で授業参観をして、他教員の授業評価を行い、互いの学びとなり、次の授業に活かすことができた。教員相互が成長できるように次年度も継続する。</p> <p>平均点は看護高等課程は昨年度より若干高く、看護専門課程は昨年度とほぼ変化はみられず、両課程とも4.8の結果であった。</p>
IV 教授・学習・評価過程	4.7	<u>4.6</u>	<p>授業評価は、授業の進め方、授業内容、学生自身の授業への取り組み姿勢など、学生の授業アンケート結果をもとに報告書を作成し評価している。授業担当教員が授業の準備及び授業の実施結果と学生による授業評価の結果を踏まえた授業内容の振り返りを行い、授業計画に役立てている。</p> <p>看護専門課程では電子テキストを導入し、学生が主体的に考える学習方法を意識し実行している。また、本年度は特別行事としてSAGAスポ(全国障害者スポーツ大会)選手団サポーターとして専門課程3年生は4日間サポーター活動に参加した。専門課程の平均点は昨年度より低い結果となっているが、特別行事、他学年授業や実習等との重複もあり授業計画や授業評価等の遅延などが理由と考えられる。</p> <p>高等課程ではICT活用の一環としてGoogle Classroomに各教員のクラスを設定し、学生への課題提示や連絡事項、質問受付、資料配布や動画配信、アンケート回収、学生間のスライド共同編集や発表迄の共同学習ツールとして多面的に活用しており、平均点は昨年度より高い結果となっている。</p> <p>また、専任教員の担当科目については、高等課程・専門課程とも教員間の授業参観を実施し、他教員の授業の実際をみて、よい部分は取り入れ、教材研究を行い、逆向き授業設計、知の構造と評価規準、基準を明文化し授業展開をするよう努力している。</p> <p>今後ICT活用については、教員間で知識・教育方法等にかかなりの差が生じているため、両課程等とも指導力向上に努めていく。</p>
V 経営管理過程	4.3	4.2	<p>中途退学者を減少させるため、特に教育・学習活動に関する保護者への情報提供については、学生個々に対応し、連絡や面談等を計画立て実施し、学生の勤務先医療機関とは報告連絡を密にし、必要な情報の提供</p>

			<p>をしているが、両課程とも半数が学力不足や進路変更などの理由で退学者が出ている。</p> <p>今年度、看護高等課程1年生2名が複数の学科科目が不合格(学力不足)で退学となり、2年生1名が進路変更を理由に退学をした。看護専門課程1年生4名が退学。そのうち2名は進路変更(美容系・車製造系)、1名は学業と仕事の両立困難、1名は健康問題と経済的理由で退学。2年生2名退学。うち1名は留年(再履修)で翌年も学科の単位取れず退学。1名は健康問題と本人が看護師は向かないと感じ退学。</p> <p>入学者が定員を満たさず、学力の低い学生の入学者が増えている現状では、学習についていけず学力不足での退学や、進路変更においては学生自身が強い意志も持たずに進学してくるケースの場合、退学者が多い。</p> <p>ハラスメント防止ガイドラインに基づき、学生間、学生・教員間のトラブル防止に努めており、事案発生時には関係者への面接及び状況把握を行い、必要な対応に努めている。また、本年度より教員のハラスメント防止への認識を高めるため、教員の集合研修を実施している。</p> <p>近隣の心療内科や精神科で治療を継続している在學生も複数名おり、個別相談や教員間での情報共有、対応の工夫に努め、スクールカウンセリングへとつなげ、メンタルサポートを行っている。</p> <p>現在、ハラスメントに対し随時相談対応できるよう、学校ホームページより相談受付ができるようにしている。様々な学生たちへの対応の難しさを実感することも多いが、今後も努力していく。</p> <p>両課程とも教職員に対しては、当校がどのような財政基盤によって成り立っているのか理解できるように総会・予算等の資料を回覧し、毎月管理会議(両課程教務主任・事務主任)を行い、随時説明をすることで情報共有が図られるようになっている。引き続き、看護学校経営の健全化と教育の質向上を図り、魅力ある学校づくりを目指していく。</p>
VI. 入学	3. 5	3. 5	<p>両課程とも入試受験者減に伴い、3次募集まで実施。</p> <p>高等課程の入試受験者は28名。そのうち施設推薦入試の受験者は7名、高等学校推薦入学による受験者は4名、一般入試受験者は17名であり、1名辞退され、令和6年度新入生は27名。</p> <p>令和6年度卒業生40名のうち専門課程への進学は25名(62.5%)で、当校既卒生2名と外部から新卒者受験が2名あり、専門課程の令和7年度新入生29名。</p> <p>結果、定員の確保が出来なかったが看護高等課程昨年度27名→27名看護専門課程昨年度22名→29名と定員割れはあるが、昨年度より7名増となった。</p> <p>学生募集は近隣の高等学校に出向き進学ガイダンスを実施しているが、当校の准看護師養成所の進学希望者がほとんどなく、市内高校からのガイダンス依頼も減ってきている(8名/2校)。そのため、唐津済生会病院とイオンとのコラボ「健康フェスタ」へ2日間参加し、一般客やお子様づれの家族(28部)へ看護学校案内パンフレット配布や大志小学校・外町小学校の5・6年生(52名)への職業体験・講話に参加して看護職の仕事に興味を持ってもらい、看護職を将来の職業選択の一つとしてもらえるよう努力した。今後も継続していきたい。</p> <p>オープンキャンパスや Web 説明会を2回実施し(両課程の参加者数17名)、この参加者のうち8名が高等課程へ1名が専門課程を受験している。</p> <p>また、看護学校ホームページから受験者の個別相談を開始し、7名の相談を受けた。学校訪問5名、Web相談2名を実施した。そのうち5名の方が2次・3次の一般入試を受験し入学をされている。これは、学生確保に効果的だったと考える。今後も継続的に個別相談を受け付けていく。</p>
VII卒業 就職・進学	3. 7	4. 0	<p>卒業後の進路は、専門課程卒業生39名中、県内就職が31名(79.4%)である。他県就職8名、未就職者0名、進学は0であった。また、看護師国家試験受験者数新卒39名中35名が看護師免許取得(合格率89.7%:全国合格率90.1%)。既卒2名中1名が看護師免許取得。</p> <p>高等課程 卒業生40名中、進学25名、准看護師として就職は37名で</p>

			<p>あり、未就職者3名は就活準備および就活中である。</p> <p>また、准看護師資格試験受験者数40名全員が准看護師免許取得(合格率100%)。</p> <p>当校が理念としている、地域医療を担う看護師、准看護師の育成については概ね達成できているが、今後も受験対策等を強化し、合格率を維持していく必要がある。</p> <p>卒業後の実践能力を系統的・継続的に評価することや卒業生の活動状況の分析はできていない。看護高等課程の場合は、6割弱が本校に進学しているため部分的な把握はできる。しかし、看護専門課程の卒業後は卒業生から連絡がない限り、動向等の把握できていないため、今後は卒業生同窓会との連携をもって必要な評価ができるよう努力していく。</p> <p>両課程とも平均点は昨年度より若干高くなっている。</p>
VIII地域社会	4.4		<p>看護師等養成所進学希望者への進路相談については、近隣の高等学校に本年度もガイダンスを実施した。また、市内小学校2校の5・6年生に出張講座として看護師の職業体験を通して、将来的な職業選択の一つとして認知してもらえるよう努力している。来年度も継続・拡大できるよう努力していく。</p> <p>看護高等課程の場合、学則上受験資格は中学校を卒業した者に限定しているが、今後、外国人受け入れ等も検討していく。</p>
VIII地域社会 <u>国際交流</u>		3.7	<p>看護専門課程については、カリキュラムに授業科目を設定している。講師はJICA国際協力講座の協力を得て、国際看護を実践した体験のある看護師に依頼し、国際的視野を広げることの大切さを学生は感じることができていた。</p> <p>看護専門課程の場合、学則上日本の准看護師免許を取得した者で日本語能力検定試験N1認定の人に限定し、専門課程の受験資格を変更しているが、外国からの帰国学生や留学生の受け入れ体制は十分に整っていない。</p>
IX研究	3.6	4.0	<p>研修会参加教員は、受講後研修会報告書を提出する。その報告書を全教員へ回覧し研修会の内容・学びの報告をしている。また、令和4年度よりICTを活用した看護教員の継続的な学びを提供する「医学書院 NEO」を導入しているが、教員個々によって利用状況も極端に差がある。今後は、勤務時間内を有効に活用して、セミナー視聴ができるよう業務改善を行っていく。</p> <p>看護高等課程では、面接時や実習指導時にPSA(精神医学ベースのパーソナリティ診断分析)を活用し、役立てていくようにしている。両課程とも今後は更なる活用方法を検討し、学生の理解につなげていく。</p> <p>全教員は科目授業終了後、授業設計や教材研究に繋がる授業評価を行い回覧しているが、学生の生活指導等に多くの時間を要し、計画的な提出や回覧ができない状況である。今後とも看護教育の質向上に向けて、研究課題を各教員がもち計画的に取り組むことができるように業務の効率化や業務分担等の工夫や支援方法を検討していく。</p>